

「国際経済関係と哲人キルケゴール」

中内恒夫（国際基督教大学名誉教授）

デンマークの孤高の哲学者セーレン・キルケゴール(1813~1855)のイロニーの精神に注目したい。その意味はひとびとの望んで止まないものを自分が手に入れたときに、それを無価値のものとみなすということである。キリスト教の実存主義に立つキルケゴールはこのイロニーの精神を重んじ、単独者なる概念を思考の基礎とした。これは個の立場を重んじ、物欲・権力・名誉から自由にならんとする思想であり、全体主義的思想の対極に位置する。

今ここでキルケゴールを引き合いに出したのは、日本経済が、明治維新、終戦を経てグローバルイズムという近代第3番目の転換点に立ち、いかにそれを超克するかを探究するためである。従来の政府主導に依存した精神状態では現実の世界的競争に伍して立ち行かないと考えられるからだ。幕末から明治にかけては、エリートを養成してその指導に従うことが必要かつ有効であったが、現今の世界では少数のエリートの判断は必ずしも多数の市民的判断よりもすぐれているとは言えなくなってきた。一方、権力を握れば人間は必然的に墮落する。社会主義国の失敗は結局は権力の独占による指導者の人間的墮落によるものであった。

幕末の日本は列強に囲まれ、植民地化される危機感のもとで急速な近代化を政府主導のもとで行う必要があり、またそれはかなりうまくいったと言える。しかし振り返ってみればそれは膨大な官僚機構という負の資産を残すことになった。

だが今までは効力を発揮し得た政府主導型発展も今後は民間主導型でなければ世界の中の競争にたえられない。もともと稲作民族の農耕社会を通じて体得した集团的協調方式から市民的民主制に移行して成功するには個人主義的思考方の鍛練が必要である。

この転換に成功するか否かで未来の世界における国際的分業の一翼を担えるか否かが決まるとも言えるだろう。日本人が先人の遺産として受け継いできたもの作りの強さを将来も持続し、技術面で一日の長を確保して行くには成熟した市民的自由を身につける必要がある。この鍛練が不十分だと、後進の教育、社会資本の充実、社会的同情心の涵養に失敗することになりかねない。

われわれの長所は神学的争いで戦争を引き起こす恐れが少ないことだ。日本人の宗教感

は永年農耕を通じて自然とつねに密接に接触してきたために、多神教に馴染み、神学の相違による戦争が起こりにくい。しかし一方キリスト教のような、神との人格的対応によるボランティア精神や寄付が少ない。反面日本では自らは信心深くありながらも他人の宗教にたいして寛容である。

日本の政治家は今後、政府や公的機関の役割をできるだけ小さくし、市民ないし民衆に対して情報公開に努め、市民の円熟を俟って大衆による民主的判断の実をあげるように誘導する必要がある。かつてジョン・スチュアート・ミルが自叙伝で嘆いたような大衆の判断レベルの低さから来る悩みは現在の我が国では幸いにも遥かに少ないと言えると思う。だが日本の公的援助がその量に相応しい尊敬を払って貰えないことは残念なことだ。ODAについては日本人の内面から発動するヒューマニズムの声を反映するように対象を厳選し基本ルールに反するものは厳しく切り捨てるという態度を貫くことにより、自らの哲学を明確に発信して行けば徐々に改善可能であろう。